

兩親は云ふも更なり、番頭から丁稚女中に到りますまで、夜の目も寝ずに案じ暮らして居ります。

「へ、若旦那、お暑い事で、今日はお身體の具合はどふでムります」

「ア、番頭。毎日々々親切に訊ねて貰ふて有難ふ。モウ／＼皆はんのお志は、死でも忘れやへんで」

「アもし若旦那、そんな縁起の悪い事を仰有る物やムりまへんがナ。先刻も醫者のお話では、どふも御病氣の見立がつかん、これは必然氣病ひと云ふて、何か心に思ひ詰めてなはる事が有るに違ひない其願ひ事さえ叶ふたら病ひは嘘の様になるに相違ないと仰有てムりました、其處で親旦那のお考では、反つて親には話のし悪い場合が有るかも知らん、番頭お前から一つ訊き出して貰えまいかと斯ふ云ふお話でへエ。それで鳥渡お伺ひをした譯でおますが、貴方はん、何ぞ思ひ詰めてなはる事が御座りますか。」

「すると何か、醫者がそない仰有るか。」

「左様云ふてムりました。」

「あゝ恐れ入た。流石は大阪一の名醫と云はれるお方や。實はなア番頭、眠ても醒めても忘れる事の出来ん事が一つあるのや。」

「それやツ。夫れが貴方はんのお身體に災をしますのやがナ。さア云ふてお仕舞ひやす。何を思ひ詰めてお居なはる。」

「それが云える位なら何もこんな苦しい思ひをしやへん、……………兩親は心配してはるやらうなア。」

「御心配處の事やおますかいナ。毎日々々泣き暮し、目に見えて瘦せて御座りました。」

「あゝ濟まん事や、今日まで育て、頂いた御恩も返さず、まだ其上にこんな嘆きまで見せて申し譯がない、せめては一日も早ふ冥途へ行て、此不孝者の事を忘れて貰ひ度い、お前初めお店一統にも甚い御苦勞かけて濟まなんだなア。」

「もうし若旦那いナ。何と云ふ心細い事を云ひなはんね。私しや依てに宜え物の、御兩親にそんな事聽かして見なはれ、それこそ向ふが先に死で仕舞やありますナ。それ程御兩親をお想ひなはるなら其貴方はんの思ひ事と云ふを、ツイ一言仰有たら宜えのやごわへんか。どんな事かは存じまへんが、此番頭が引請けて、御兩親様の力もお借り申し、必ず叶えて差し上げます、さすれば忽ち御本復、御兩親のお喜びは如何ばかり、こんな親孝行が御座りますかいナ。さア、親御さんの心を察して、どふぞ云ふて仕舞ふとくれやす。」

「勘忍してや。意地張て云わんのでも何でも無いね。云ふて叶ふ事なら聽て貰ふ。及びもつかん事を云ふた處で反て親達の苦を増す丈けや。云ふも不孝云はぬも不孝、同じ不孝なれば此儘云はずに死に行き度い。どふぞ助けると思ふて、訊かすにおいて……………」

「ア、難儀やなア。……………そしたら斯ふして貰えまへんか、私が兎に角聞かして貰ふて見て、